



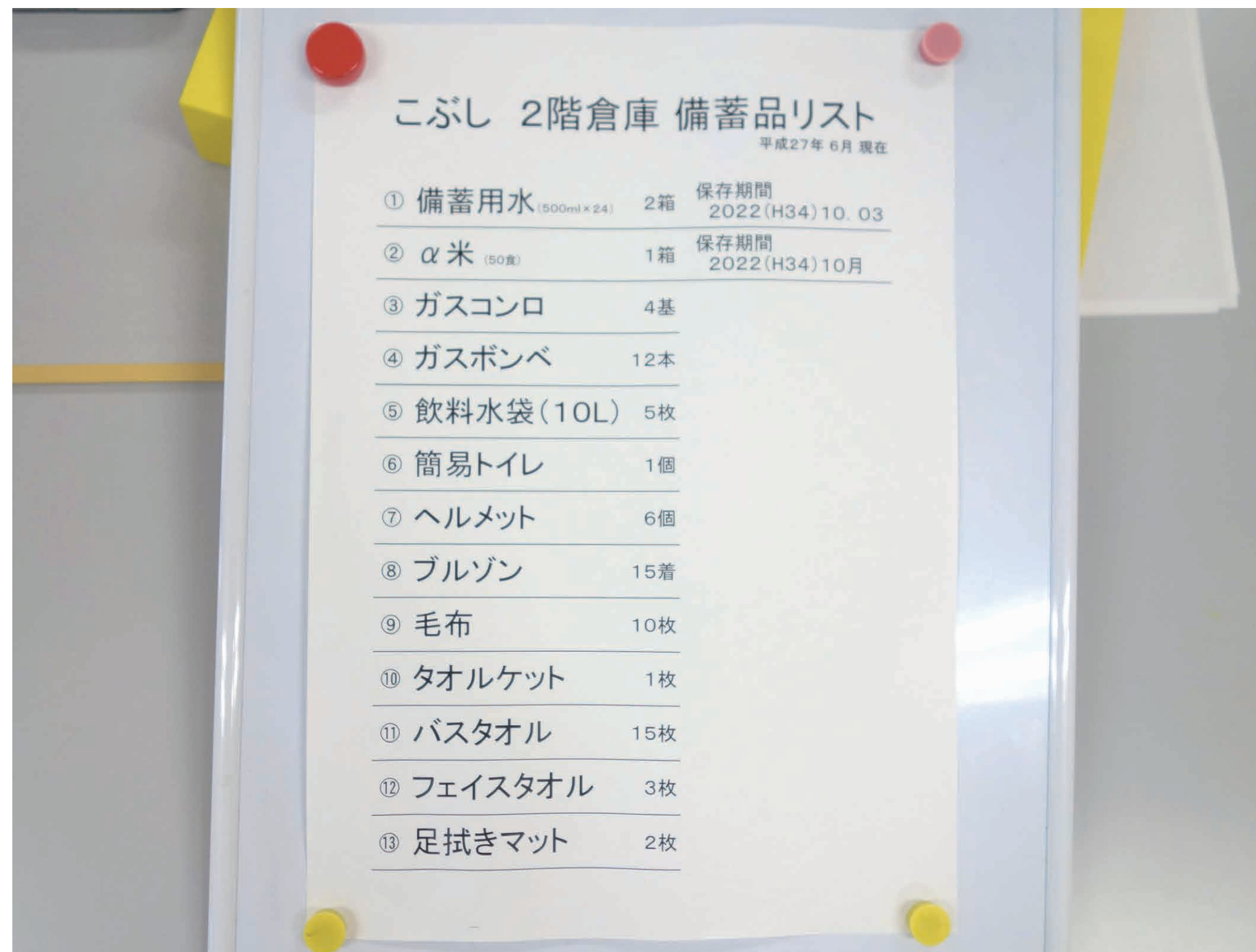
◎土谷康司さん

(社会福祉法人仙台手をつなぐ育成会こぶし 主任)

保護者との連絡が一番の困難だった。 災害時もつながる通信手段は強化すべき。



— 土谷康司さん —



— 事業所内に常に備蓄されている物品のリスト —

3.11
当日

年間6回の避難訓練のおかげで速やかな避難が可能に。日頃の準備が功を奏した。

震災当時、知的障害者授産施設(通所)として事業を運営していた「こぶし」。地震が起きた時は「ボランティア感謝会」という行事の真っ最中で、利用者と職員、そしてボランティアの約45名が一室にまとまっていました。14時46分、一斉に携帯電話の地震速報がなり大きな揺れに見舞われた時、職員は速やかに出入口のドアを抑えて脱出経路を確保し、利用者をテーブルの下にもぐらせました。主任の土谷さんは、当時を振り返りこう話します。「実は私たちの事業所では、地震・火災などを想定した避難訓練を年間6回ほど行っていました。だから利用者はそれほど慌てる様子もなく、速やかに避難することができました」。

揺れが収まってからは、築50年の建物の中にいるのは危険と判断し、一時的な避難場所に決めていた隣接の駐車場へ移動を開始しました。この段階で一番困ったことが、利用者の保護者と連絡が取れず、送迎が困難になったことでした。「電話は回線がパンクしてほとんどつながりませんでしたし、訓練で練習していた『災害伝言ダイヤル』にも伝言を入力したのですが、そちらでも保護者の方とつながることができませんでした」。このまま暗くなると移動も困難になると判断した当時の施設長は、16時頃に指定避難所である長町小学校への避難を決め、保護者との連絡用として建物の入口に「長町小学校に避難しています」と張り紙を掲示して、避難所へ移動することにしました。

避難所

事業所から持ち込んだ毛布や懐中電灯が活躍。翌日に全員帰宅することができた。

避難所はすでに大勢の人が避難していたため、運営側にかけあい、利用者と職員がまとまって過ごせるよう教室の一室を貸してもらいました。避難所は停電し十分な食料もありませんでしたが、利用者は職員と手をつないだり、体を寄せあったりして不安と寒さを紛らわしました。また事業所に備蓄していた毛布や懐中電灯を持ち込んだことにより、暖を取ったり明かりを確保したりすることができました。そして翌日には、公用車や職員の自家用車を利用し、無事利用者全員を帰宅させることができました。

現在は

新事業所で運営を再開。震災での教訓を活かし、さまざまな対策を実践している。

こぶしは、現在は老朽化した建物を離れ、新たな場所で指定生活介護事業所として運営を続けています。運営にあたり、災害に対する備えも増やしました。震災前から行っていた避難訓練を続けるだけでなく、災害時も休みなく利用でき、かつ福祉避難所として受け入れもできるよう、事業継続計画(BCP)を策定しています。また、太陽光蓄電システムの導入や通信手段の強化、ガソリンを優先入手できる契約の締結なども行いました。さらに災害時における連絡掲示物の場所の明示化や送迎方法の書面化など、震災を教訓にした取り組みで災害に備えています。